

---

# Eccentric Designer

山下 真也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Eccentric Designer

### 【Nコード】

N8437C

### 【作者名】

山下 真也

### 【あらすじ】

失われた細菌兵器。それを奪い返すべく、エージェントとその親友の頭脳戦。スピード感あふれる、分かりやすい短編小説。

## 覚 醒

「ねえ、君の名前：なんだったっけ？」

寝汗が首をつたうタイミングで聞いたと思う。

「結衣よ、結衣。昨日さては酔っ払っていたのね、あなた。」

鳥の声も聞こえる…昨日のことを覚えてない…

昨日のこと？いや、昨日どころじゃない！ここにある自分が写る物体でさえわからない、思い出せない！たしかに見覚えのあるもののに……

「結衣って言ったよね、昨日の夜のことなんだけど…」

「えっ、あなたも…なの？」

「どうゆうこと？」

なにも飲み込めない現状の中で、なにかがムズムズと背筋を這っているような感覚を感じた。

「実は私、二時間前には目が覚めたんだけど、私は誰？状態だったの！今のあなたと一緒に！」

なにいつてんだ、こいつ。

「私の名前が結衣、あなたは龍二つてな具合で段々と頭の中に浮かびだしたのよ！」

「まあいいや、それでどんな現状？今は。」

すごい汗だなこのー結衣と言う女。

「まあ見てておもしろくなるわよー」

「意識レベルA2、なかなかじゃないか、今度のは」

「はい！自信作になると思います。」

「実行プログラムは？もう起動しているのかね？」

「ええしかし…」

「ん？」

「通常のパターンでは無いと思われます。」

「ほう、それはおもしろいじゃないか。さっそくだが早急に頼むと、クライアントがうるさいのでな」

頭は多少ぼんやりしているが、頭には何種類かの映像が浮かぶ…

しかし…この映像は…なにか赤い…血！

それは明らかに目の中が真っ赤に染まって訳が分からなくなっているが、なにか匂いまで思い出す…気がする。

そして視界が晴れて、なんだろう？この建物なにか古いお城？みたいな建物だがここに、ここに行かなくてはとゆう意識が働く。

部屋を見渡し、クローゼット？たしかそうゆう名前…

裸のまま歩き開けてみる。

「ちよつと！服ぐらい着なさいよ！」

「まったく、うるさい女だな、この状況でよく平気でいられるものだ。」

俺はこの時点ですべてを思い出していた。

気がしていたんだ、この時点では…

「結衣、仕事に行こうか？」

「ん？仕事って？…そうね…」

「結衣はまだすべて思い出したわけじゃなさそうだ、俺のほうがい越したようだな。」

「ゲッ！そ・それは…なにっ？」

「俺達の商売道具だ…」

俺のベッドに並べだした物、スーツ、そして…拳銃、小型レシーバー、ボタン型の超小型爆弾、地図。

「早く思い出せ…おいていくぞ！」

すべてをスーツの中に収めた俺はそう言うと、最後にレシーバーのイヤホンに刺した。

「おはようございます。滝本さん。」

「おはよう。もうやっていいのか？」

「もちろんです、今回は急ぎの様なので…」

「わかった。出るわ」

「あつ、滝本さん！それよりも今回、体の方が…」

「体がなんだ？」

「いえ、体だけじゃなくて脳自身…とにかくなにもかもが…」

「違うんだろ？感じてるよ」

「そうですね…ならいいんですが…」

「いいんじゃないの、もともとこの世にない体なんだろう？」

「じゃ気をつけて、行つてらっしゃい。」

こいつの名は、沖本。

ICFの科学エリアの責任者だ。

仕事の連絡、俺達の体の管理等の仕事をしてくれてはいるが、俺達のプログラムはすべてこいつが組み立て、動かされてると言ってもいいな。

「できたわよ、用意。」

結衣が声をかけてきた。

最高のパートナーだ、身体能力、頭の回転、なにからなにまで完璧だ。

それに体の相性もいい。

人間ではないが…そんなことは俺にとってなんの障害にもならなかった。

「龍二、いつもと違うわね。」

「どこが？」

「うーんなんとなく。覚醒も早すぎるし、なにもわからないふりを覚醒するまで続ける小芝居いらないよね、絶対。今日みたくタイムラグがあつたらたまないわよこっちはそれもプログラムに入ってるんだから。」

「仕方ないだろそれが俺の脳にはそれがいいってのが沖本の自論なんだから。」

それより、行くぞー！

## ミッシェン

なんだろう？秋なのに日差しは強いし、なんだか暑い。

「しかし今度の仕事…」

「ん？なに？仕事がどうしたの？」

「嫌な感じだ」

「仕事にいい悪いもあるの？」

「……」

「私にはいつもとかわんないような気がするけど…違つと言えばスケールかしら、でも今までにもこのぐらいのケースはこなしてるわよ、私達」

「そうだな」

今度の仕事…たしかに結衣の言う通り、取り越し苦労つてやつかな。東京の景色とはかなり違つて見える山々、湿度も少し違うな。

まあおよそ都会の真ん中にはこんな施設は作れんだろうが…

少しの間車を停め見取り図らしきものを見てみる。

ここまで調べてるんだつたら自分達で出来んのかねなどとも、うん、いつも思うなそれは。

たしかに二人で潜入するにはかなりの広さだが今までもこなしている…

やはり俺が気になるのは人…か。

もう一線は退いてはいるが、鐘巻 善五郎。

このじじい日本人では知らんやつはいないだろう、俺でも知ってるぐらいだな。

表では海外支援とかで逆に政界を退いてからのほうが有名かもしれない。

俺に言わせりゃ、こうゆうやつが一番信用できんがな。

そして反町 大吾。

鐘巻の懐刀とゆうところか…そんなやつではないと思うが…

鐘巻と一緒にいるところは絶対見せないやつが、この山奥の要塞でだけは、顔を合わせる…間違いなく重要拠点には違いない。

大吾がいる、それだけでこのミッションは倍額になるな。

もう二十年もたつが、同じ大学にいた大吾は百年に一人の逸材と呼ばれ、俺とは対比するとそれこそまったく正反対の、ここまで違う人間がいるのかとゆうぐらいの違い方だった。

だから気があったのかもしれないが、あの四年間一緒にいなかった日のほうがまれだったな。

善と悪、だった二人が悪と悪になってご対面か…懐かしさなんてセンチメンタルなものづくに無くしていた自分の心に大吾が入ってきたことに、むず痒く、笑いさえこみあげるのだった。

「おや珍しい、笑ってるよこの人。」

およそ見たことの無い、パートナーの顔の変わり具合がとても新鮮でおかしく見えたらしい。

「もうそろそろ車を隠さないとな。」

「そうね。」

お互いの顔の神経が少し変わるのを、お互いを感じる瞬間だった。

「おい、もうそろそろいいだろ。」

教えねえか今度の仕事、なんなんだ？」

俺はイライラしてるぞって雰囲気丸出しで沖本に聞いた。

「細菌です。」

「そんなこつたろうと思つたぜ、軍隊でも行かせりゃいいじゃねか、ばかやろう！そんなもん持つてる敵が、たつた二人の敵に、敵にだぞ！お・き・も・と！はいそうですかと渡す。」

そんな適当な警備なわけないだろうが！」



「フッフッフッフ」

いつ聞いても嫌な笑い声が聞こえる。

「いたのかい？」

「いたらだめかな？」

「そんなら話が早い、なんとかしろよ！」

このいないと思っていた、いるともおもっていたが、こいつが俺達のICFのボス、川上 三郎だ、もちろんこいつがほんとのトップだとはだれも思っていないが、ICFではこいつが全責任を担っている立場にいる。

こいつに声を掛けられた時が俺達の人生の終焉だったかもな。

「お前達は軍隊より弱いのか？」

これだ、これでいつも乗っちまう俺も結構単純だなと、仕事が終わった後に思う。

「わかったよ、行けばいいんだろ？この装備でねえ。」

「それもいつもどうりだろ？奪えばいいじゃないか、フフ。

適当な警備じゃないんだろ、敵は？」

そのとうりだね。

もういいや。

「いい死に方しねえぞ、じじい！」

「お互いにな。」

それより滝本君、反町君とは旧知の仲だが大丈夫……いや失言だった、取り消すよ。」

「ふん！じゃあな。」

## 傷跡

さてこれからどうするか…

野宿は久々だが、車を隠し、おおよそ人が来ない場所、しかも敵が見える場所？で起こした火を見つめながら、考えていた。

「今度の仕事はいきあたりばったりとは行かないわね。」結衣も同じことを考えている様だった。

「けど龍二が気にしてるのは、やっぱその反町って人のことだよ？そんなにすごいのか？」

「いや、頭だけならそりゃあ、沖本のほうがいいにきまつてるさ。けど俺が引つかかるのは、きつとそんなことじゃないと思う。もつと気味が悪い、いつもこっちを見透かされている様な…」

「野性の勘ってやつね。」

龍二の野生の勘はばかに出来ないからなあ。

それで何回も助かってるから……とにかく、今日は寝ましよう。明日、どうしても行かなくちゃならない訳でもないから。

急ぎで、っただけでしょ？」

「そうだな。」

言つとおりにしようと思った。

ダダダダダ、タタタタタ、ゴウワン！

なんだ？これは？

戦場にいる、後で考えれば、夢。

俺は昔思い出し、夢にうなされてるらしい。

「へりはまだか？ジャン！これ以上は食い止められんぞ！ジャン！ジャン？」

そこには頭が半分欠けた戦友がいた。

「いつまで……」

俺は呟やいたのか、心の中で言ったのか、分からなくなっていた。迫りくる敵、死んでいく戦友、普通の日本じゃまだ小学生ぐらいの子供に銃を向けられ、俺はもうどうかかなりそうな状況の中で、ただただ人をどうしたら殺せるか考えていた、自分が生き残る為にはっ！と目が覚める…

「女とエッチなことしてる夢でもたまには見ればいいのに…」  
火をじつと見ながら、膝を抱えて呟いている結衣がいた。

この女は俺があ頃の夢しか見ないのを知っている唯一の女だった。

「もう朝なのか…」コーヒーの香りを感じながら、また首筋につたう寝汗を拭っていた。

さてどうしようかな？しかし敵はあの大吾だ。

もしかして今現在、俺達の場所さえ確認されているかもな。

などと考えながら、「尻尾まいて逃げるか？」結衣に聞いてみた。

「逃げる気なんか最初から無いくせに…」

そうゆうことだな…

## 潜入

「山本 結衣？なにもんじゃ？」

「どうやら加田先生の紹介で支援のほうに入ったのが三ヶ月前、来てすぐ支援の方でちょっとした事件がありまして…」

「事件？」

「はい。」

その時の対応が上原から上がってきまして…」

「おぬしの目に留まった…とゆうことか…」

「まあそうゆうことです。」

「まあおぬしがそこまで言うのなら間違いないじやろつが、いきなりこの要塞にのう…よほどの女じゃな。」

「すべてにおいて、完璧といわざるおえندしような」

カタン、ノックの音と同じタイミングで老人がグラスを置いた。

「どうぞ。」

「失礼します。」

「ほおう、これはべつぴんさんじゃな。」

鐘巻はいやらしい微笑みを浮かべ、その目だけは笑わず、その女の心をのぞくことに集中していた。

「君は、相当出来る様じゃが、この要塞に来ること、いやこの要塞をみてなんとも思わんかね？」

「はあ、それは多少の疑問を感じてはおりますが、反町さんから先生をお名前が出た瞬間に、覚悟を決めておりますので…」

「覚悟？」

「はい。」

私、先生が副総理をなさっている時にすでに感服しておりましたので。」

「ほう、見所はあるが、わしのどの部分にじゃ。」

「先生の悪の部分に。」

「それでも善人で売っておったんじゃがのう、どこで分かる？」

「人相といいましようか…細かく言うとも目ですね。」

瞳の奥にある、暗闇が見えまして…

この要塞から出て行くことが、永遠に無かったとしても私、悔いは残しはしないと思います。

そうゆう覚悟ですわ。」

「大吾が気に入るはずじゃな。」

肝もすわつとるわい、ガッハッハッハッ、まあお願いする。

頑張ってくれたまえ。」

「はい、よろしく願いします。」

ふう〜まつ、こんなもんか…

それにしても、こんな要塞、頭に機械でも入って無かったら、絶対に迷子になるわね。

ながいこと居ればまあ覚えるんだろうけど。

どうするのかしら龍二は…って考えてもしょうがないし、三日間とにかくくろくろしましようかね、私は…場所覚えるフリしながら…

「ルートは頭の中だし俺は暇になったな…結衣は間違いないだろうし、武器はあそこにあるし、忙しいお二人さんが居ない三日後に向けて、何かやりのこしたことがないか考えとこうか…」

などと余裕がまだまだあった俺に、インカムから声がしてきた。

「チーース！」

「いない。」

「えっ！」

「いない。だ、馬鹿、聞こえねえのか？」

「そりゃないっすよーりゆうさん。」

俺だつて来たくて来たわけじゃないし、ドクターに言われて来てるんから…

それに今回、暴れるだけじゃないでしょ？お宝になにかあるとボス

も首飛ばらしいっすから。」

「そんなことするか、ちゃんとやってやるから、お前は帰れ！」

「たつきもつとさーん、わがまま言わないで下さいよあ、ボスがうるさかったんでね、今回は…」

「そうだろうな。」

だからって俺の任務はお守りじゃねえだろ？こんなものいらねえよ。

「

「まあまあ純ちゃんも、腕上げてるつつつか、腕なんていらないでしょ、ただ運ぶだけなら…」

「だから、運ぶってことは俺が結衣がこの馬鹿に渡すってことだろうが！天才！そこで必ずなんかやるし、やってきたんだよ！こいつわ！」

…長い沈黙。…

「わかり」

「わかった、やらしてやるよ、ただし最後だ、純。今度やったらその場で殺すぞ。」

それでもやるのか？俺は嘘は苦手だぞ。」

沖本の返事を割って、俺が承諾した。

純は涙ぐみながら、なにか決意のようなものを瞳に燃やししながら言葉を吐いた。

「よろしくお願いします…」

「いやあ、丸く収まって、良かった」

プチッ。

無線を切ってやった。

「結衣はここには居ないが、やつも命がけだ。」

それ忘れんなよ。」

純は言葉が出なくなったらしい、黙って、ただただ頷いていた。

俺は、惇に丸一日かかってミSSIONの進行を叩き込んだ。

「すごいっすね、相変わらず。」

随所に無茶苦茶が一杯だ。

よくいつもいつもこれを普通にやりますね。」

「俺達には普通だし、大吾や親父、沖本、そして結衣にいたっては、このぐらいじゃなきゃだめねって言われるよ、きっと。」

ただ…」

「ただなんですか？」

「さっきも言った様に、大吾は侵入者が俺だときずいて無くっても、対応出来るってことだ。」

「うーん…それじゃどうしたら…」

「アドリブだな。」

「アドリブ？」

「ああ、考えちゃ駄目だ。」

感性の勝負になるだろうな。

つまり………適当ってことかな。」

「はあ？適当っすか？」

「感性なんてそんなもんじゃねーの。」

「大丈夫なんですかね…」

「大丈夫かどうかじゃねーだろ？やんなきゃしょーがねーんだから。」

「そーですね。」

と、惇に言ったものの、俺の胸騒ぎが止まることはなかった。

ずっと感じているこの感覚、大吾との空気感とゆうか、相性の悪さとゆうか…

「死ぬかもしれねえな」とゆう言葉を俺は飲み込んだ。

俺達の仕事はそうゆう仕事じゃねーか、なにを今更…驕ってるんだな、絶対死なないとも思ってたのか、俺は馬鹿になってるのか  
ぼけがきたかどっちかな。

## 黄昏

「そろそろ君は消えたほうがいい、これは龍二と俺の戦いだから……」  
夕日を見ながら大吾が呟く。

「えっ」

「なにも知らないと思ってた？」

君たちのこと。

僕らの組織もそのぐらいの情報網は持つてゐるつもりだけど。」

「じゃああなたは知ってて？」

「うん、ぶっちゃけ退屈なんだよ、僕。」

なにもかもが……」

「ふうん、私達は退屈しのぎってわけか……高くつくわよ、この退屈しのぎは。」

「そう願いたいね。」

僕は零か百の勝負がしたいんだよ。

君達との勝負を純粹に楽しみたい。

自分の限界が見てみたい……」

綺麗な目をして言うわねこの人。

吸い込まれそう。

けど本心みたい……」

「老人と僕が両方居ないってリークしたのも僕だし、君の仕掛けた爆弾もすべて除去したし、後は龍二がどう細菌を持ってこの要塞から出るかだけなんだけど……」

「そうゆうことか……それじゃさすがの龍二も無理かもね。」

「随分余裕なんだね、すべて洩れているにも関わらず。」

「余裕があるのはそっちじゃない、すごく感じるけど。」

「そうかな……」

「それに……」

「それに？」



「あなたはどうかかわからないけど、私には少なくとも龍二は未知数なのよ、単純にわからない。」

「そこだよ！僕もそうゆう意味で期待してるんだ。  
龍二に。」

そして大袈裟かもしれないけど、この世でそれが出来るのはあいつしかいないって思ってるんだよ、ほんとに。」

「変わった人ね。」

「お互いにね、早く行って教えてあげなよ、振り出したって。」

「それがそうもいかないかも。」

困った顔で答えるしかなかった。

またかよとも思った。

グウーン！ビー！ビー！ビー！

けたたましい警報音だわね。

お互いの顔を見つめる。

「ねっ、予想出来た？」

この人、なんて嬉しいそうな顔するのかしら。

「たままないよ！この思考回路が僕には無いんだ！さあ始めよう

！」

「なんなのよ！私、どうしたらいいのよ。」

なんで撤去された私の仕掛けた場所で爆発が起きるのよ。

いらなかったんじゃない、私。」

怒る間も無く次々に爆発が起きる。

「惇ちゃんて子も入ってるってことか。

じゃ次は武器庫？」

「逆よ、武器庫はもう終わってるわ。」

## トリックスター

「今頃、目を白黒させてるでしょうね！反町は！」

「惇君、大吾を驚かすのが目的じゃないでしょ…そんなことはどうでもいいんだよ！」

少々骨は折れたがな。

今、自分に出来る全力疾走で走りながら、次の目標に向かっていった。

「けどどうして、結衣さんのことばれてるって分かったんですか？」

「なんとなくだよ、なんとなく。」

まあそれが大吾にはアドリブに写って、トリックに感じるのさ。結衣は切れてるだらうけどな。」

「いいんですか？結衣さんほつといて。」

「お前殴られるぞ、結衣に。」

「どうして？」

「あいつは慌てちゃいねえよ。」

大吾は女相手にするやつじゃねえし、たとえ殺されそうになっても、結衣は一人で脱出出来るんだよ。」

「なんでそんなことわかるんですか！絶体絶命の危機ですよ！」

「それはお前の価値観さ。」

少なくとも、俺や結衣は違う。

そうゆうもんなんだよ、ぼうや。

殴りたいなら、止めねえよ、助けに行けば？」

「わかりましたよ！」

敵が回りに居ないのを確認し、俺は立ち止まった。

「どうしたもんかな？」

「なにをですか？」

「だから嫌だったんだよ、お前を連れてくるのは…」

大吾が俺達の持つてる凶面通りの場所に細菌なんてもん置いてるはずねえだろ？

その場所の見当がつかねえから悩んでんじゃねえか！」「なるほど…けど。」

「やっぱそうだよなあ、大吾の懐だよなあ。」

けどそれだとお手上げなんだよ。」

「えっ。」

「わかんねえか。」

大吾を生かしたまま奪い取るしかねえんだよ！けどそのぐらいの策はあるだろうし、殺したらその場でバーンだ。」

「じゃ自分達も…」

「お・わ・り・だ。」

まったくいつもいつもこのパターンだ、嫌んなるぜ。

結局正面かよ…

「と、彼も考えているはずだ。」

「その裏でここには無い、とか？」

「君はほんとに素晴らしい女性だね、アンドロイドでなければ結婚を申し込むよ。」

「それはどうも、けどあんまなめてっと、自爆するわよ、ニヤニヤしちゃって。」

「それでもいいんだが、もう少しこのゲームを楽しみたいんでね、僕は。」

すくなくともここまで期待を裏切りはしないどころか、さすが滝本って動きしてるんでね、彼は。

僕は痺れてるんだよ、この結果に。」

だめだわこいつ、いかれてる。

「けど言えないよ。」

「なにを？」

「さっきから逃げようと思えば、いくらでも逃げられたはずだ君は、

それをしなかったのは、細菌のありかを突き止めるため。

そうだろ？」

「じゃ単刀直入に。

どこにあるの？細菌は。」

「遠いところさ。」

また綺麗な横顔を、今度は月明かりに照らしながら、とても愛しそうに呟いた。

## 決着

俺は瞑っていた目を開いた。

「大吾に会うか…」

となりでじつと俺を見ている惇の視線は気にせず、俺はまた走り出していた。

「どうかね？」

「これは先生。」

まったく素晴らしいチームですよ、ICFは。

僕の範疇はとくに超えてきます。」

「すごい評価だねえ、君にしては。」

しかし結果はこの通りだからね、私たちとは共存に値しないな。」

「おっしゃる通りです、残念ですが。」

「そこそこに、撤収したまえよ、君も。」

「はい、分かりました。」

そう言つて電話を切ると不思議そうな顔をして、大吾は、私の顔を覗き込んだ。

「まだまだ随分余裕のようだね、君、いや君達は…」

「そう見える？」

「見えるねえ、なぜだろうまるで強がりに見えない余裕だ、種明かしはまだ先かな？」

「うーん、自信は無いけど、なんか感じるの。」

「だって…」

「だって？」

「私を助けるつもりなら、あいつ、足でも折ったんじゃないの？」

「どうゆうこと？」

「こんなに時間かかったことないもの、私を助け出すのに。」

おじいちゃんどこにいるの？

爆発ってタイマーで起こせるし、第一爆発が起きてから何分たってるの？

あんた馬鹿じゃないんでしょ。」

少し考えていた大吾の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「まさか！」

「そのまさかしかないでしょ、そうなった以上もう間に合わないわ。」

ずっと視線を落として、目を閉じ、呼吸を整えているように見えた。すごく静かに。

「さすがだね、負けた…」

「そうゆう顔のほうがさわやかで好きだなわたしは。で私を道ずれにする気？」

彼は静かに首を振った。

「最初からそんなつもりはないよ。」

君はここから早く出で行きたまえ。

そして龍二に伝えてくれないか？

ありがとう、と。」

## 帰還

「なんだ？ヒッチハイクか？」

キイイー急ブレーキを踏んだ。車を止め窓を開ける。

「シユ！」

完璧なストレートだった、俺の顔が歪み、脳ミソが揺れる。

「さっさとドアあけなさいよ！」

サツサツ、惇のこんな早い動きみたことねえぞ。

「どうぞどうぞ。」

なんて面してんだ、実に卑屈だ引きつつてるぞ。

ドカツと女は座った。

「お疲れさん、完璧ね相変わらず。」

「そりやどうも。」

ヒリヒリするほつぺたをさすりながら、俺は言った。

「で？」

「で？」

「どうやったのよ。」

「まあだいたい結衣の思う通りじゃないの？」

「ふうん、だいたいね。」

おじいちゃん、どうだった？龍二が現れた時。」

「うん、ありやあやっぱ大したもんだ、うん。」

まったく動じず、おお、よく来たなって感じよ。」

「ふうん。」

「それどころか急に悲しそうな顔して、大吾はもうこの世にはおらんのか？なんて言い出してさ。」

「やっぱ自分の息子ぐらいに思ってたんだろっな。」

龍二の顔も曇って行く。

「最後はほれてよ、ほうり投げやがった。」

心臓が止まるかと思ったよ、まったく、細菌だぜ。」

「けどまだまだそうゆう兵器？ いっぱいあるんでしょ？」

「そうだな、それで金儲けしてやがるんだ。」

何百人死ぬんだぜ。」

「また行かなきゃね。」

「俺はごめんだけどな。」

後ろの小僧が行くんじゃねえの。」

「一人じゃ行きませんよ、俺は。」

「じゃそこのおばちゃんと行くんだな。」

バキッ！

さつきと逆の頬が歪む。

「わかった、お姉さん。」

「馬鹿！ そんなこと言ってんじゃないわよ、あんたも行くの！」

「へいへいわかりましたよ。」

「言いましたね。」

またこの馬鹿だ沖本とはしばらく喋らないって決めたんだ。

プチッ。

いつもの様に無線を切った。

そしていつもの様に、アクセルを踏んだ。



## 帰 還（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

私にとつての処女作で、なんか殴り書きの様な感じさえ自分ではしていません。

けど、やっぱり忘れない作品になると思います。

これからもジャンルにとらわれず、がんばって行きますのでよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8437c/>

---

Eccentric Designer

2010年10月8日22時42分発行